

I 2017年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2017年度大学評価結果総評】

生命科学部が3学科体制になって初めての卒業生を出すにあたって、実験・演習や卒業研究など、実践的でより綿密な指導によってコミュニケーション能力や実践的な問題解決能力をつけさせたいという意気込みが感じられる取り組みがなされており、評価できる。特に大学院進学にも配慮したキャリア教育に力を入れており高く評価できる。生命・環境・植物の各学科はそれぞれ特徴のある取り組みを行っているが、さらに互いの連携を強化し、学科としての特色を保ちつつ学部としても大きな成果が得られるよう改善に努めてほしい。

生命科学の分野は進歩の速度が速く、学生に教える内容も年々変わっていく必要がある上、学生の気質も年ごとに変わっていくことから、学生の学習達成度等を詳細に把握しつつ、学位授与方針を確実に達成できるように最適なカリキュラムをどう設定していくかが今後の大きな課題になり、そのような点で学生を主体とするような取り組みが増えていくと推察される。教員組織や教育研究スペースなど限られた資源を有効に使うことで着実な成果を挙げられるよう、今後の学部や学科の充実・発展に期待したい。

【2017年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）

生命科学部は、2014年度より3学科体制になって初の卒業生を出すこととなったが、3学科ともに、卒業生には実験・演習や卒業研究など、実践的でより綿密な指導によってコミュニケーション能力や問題解決能力をもつ学生を育成している。特に、理系進学ガイダンスなど、大学院進学にも配慮したキャリア教育に力を入れた結果、学部からの進学者数の大幅増加を実現した（18年度大学院進学予定者数は75名となり、前年度57名から18名の増加）。3学科はそれぞれ特徴のある取り組みを行っており、互いの連携を強化し、学科としての特色を保ちつつ学部としても大きな成果が得られるよう、執行部会議において互いの連絡の強化に努めているところである。

一方、進歩する生命科学分野の最新情報を、これまで以上に広範かつ積極的に教育に取り込むよう努めるとともに、引き続き、学生の学習達成度等を詳細に把握し、教員間での情報共有を図り、学位授与方針の確実な達成を目指しているところである。教員組織や教育研究スペースなどの資源は限られているものの、2017～18年度教養教員を3名採用するとともに大学院教育に携わる教員1名をいずれも純増で採用し、本年度は2019年度採用に向け教養教員1名（化学）人事を行う予定である。

【2017年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

生命科学部は3学科体制になって初めての卒業生を輩出し、大学院への内部進学者が前年度より18名（約30%）も増加したことは、教育研究組織として特筆すべき成果といえる。キャリア教育の取り組みについては、他の理系学部にとっても模範になるであろう。2017～2018年度にかけて教養科目担当教員を3名純増とするなど採用人事が進行しており、教育体制の充実が期待される。教育・研究の両面において大学のプレゼンスやイメージ向上につながるよう、学科間の連携強化、丁寧な採用人事など、地道ではあるが効果の大きい取り組みを、着実に実行して頂きたい。

II 自己点検・評価

1 理念・目的

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。

【理念・目的】

生命科学部では、生命科学の基本原理の解明と、その成果を多面的に利用し、人類の生存環境の向上に取り組み、「生命」と「環境」と「物質」の三領域の有機的連関に基づく、最新生命科学および化学の知見を活用した「持続可能な地球社会の構築」に貢献できる人材の育成を目指す。併せて、柔軟で、統合的視野を持った実践的研究・技術者の育成に努める。更に、グローバルな視野を持ち、多様化社会で自立して活躍するためのコミュニケーション能力を有し、キャリアデザインができる人材を育成する拠点の樹立を目的とする。

生命機能学科では、「1分子、1細胞の視点から生命現象を理解することを出発点とし、生命がシステムとして調和的に働く仕組みの解明を志向した先端的生命科学教育」を目的とする。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

環境応用化学科では、「グリーンケミストリ（人と環境にやさしく、持続可能社会を目指す化学）の理念に基づき、化学の知識をベースとした低環境負荷型機能性物質の開発、環境保全、エネルギーに関する応用技術のための教育」を目的とする。

応用植物科学科では「植物病に対する的確な診断・治療・予防が行えるような実践的人材の養成」を、理念として掲げ、この達成を図る。

【人材の育成に関する目的及びその他の教育研究上の目的】（教育目標）※学則別表（11）

生命科学部は、以下に示すような人材を育成する。

1. 生命・環境・物質（資源・エネルギー）・食料などの諸問題解決のための学際的学問を習得し、柔軟で総合的視野を備えた実践的研究・技術者。
2. 多様化社会で自立して、活躍できるためのコミュニケーション能力、国際性、問題解決能力を有し、キャリアデザインができる人材。

さらに、各学科において以下を設定する。

<生命機能学科>

1. 幅広い科学の見識を備え、個々の生体分子の機能から高次の生命システムまで総括的に把握できる人材。
2. 論理的思考に基づいて、仮説を立て、それを実験によって検証できる人材。
3. 科学英語に習熟し、豊かなコミュニケーション能力を備え、国際的に活躍できる人材。

<環境応用化学科>

1. 「グリーンケミストリ」の理念を習得し、21世紀型先端化学を基礎として、産業界で活躍する高度な科学技術者・研究者。
2. 化学および自然科学の専門知識を着実に身につけ、未知の問題を解決できる柔軟性を備え、国際性を身に付けた技術者・研究者。

<応用植物科学科>

1. 植物とそれを害する生物・環境の間での相互作用を総合的に捉えることができ、実地での植物病の診断と治療ができる研究・技術者。
2. 食料、環境問題とその背景となっている経済・社会的総合知識を習得し、温暖化や流通のグローバル化によりもたらされる世界規模の問題に対応できる人材。

①学部（学科）として目指すべき方向性等を明らかにした理念・目的が設定されていますか。 はい いいえ

②学部（学科）の理念・目的は大学の理念・目的を踏まえて設定されていますか。 はい いいえ

③理念・目的の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。

（～400字程度まで）※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、具体的な検証プロセスを記入。

生命科学部では、各学科において、担当教員がカリキュラム運営・学生の学習状況・志願者数・学科独自のものを含む各種のアンケートなどを検討し、教室会議できめ細かい議論を行っている。さらに、生命科学部執行部会議で適宜検証を行い、必要に応じて教授会に諮ることで理念・目的の適切性を検証している。

1.2 大学の理念・目的及び学部・研究科等の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

①学部（学科）の理念・目的は学則又はこれに準ずる規則等に明示していますか。 はい いいえ

②どのように理念・目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。

（～400字程度まで）※具体的な周知・公表方法を記入。

生命科学部では、その理念・目的をホームページやパンフレットにより社会に周知するとともに、学生には年度初めに行うガイダンスで周知を図っている。さらに各学科が独自のホームページを構築し、パンフレット等を作成することで、一層の周知を図っている。

(2) 長所・特色

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

生命科学部全体で設定された統一的な理念・目的に加え、生命機能、環境応用、応用植物科学それぞれの学科で理念・目的が独自に設定されている。理念・目的は大学のそれらを踏まえて設定されており、適切性の検証については、学科内での教室会議や学部の執行部会議で行われているほか、必要に応じて教授会にも諮られている。関係者への周知については、学生へは年度初めのガイダンス等で、教職員や学外者に対しては、学部・学科ホームページや学科パンフレット等で公表されており、適切である。

2 内部質保証

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。

① 質保証委員会は適切に活動していますか。

はい いいえ

【2017年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】 ※箇条書きで記入。

- ・生命科学部質保証委員会は、学部長、教授会主任、副主任、および各学科より選出された委員の計6名で構成されている。2017年度の構成は、委員長：川岸郁朗、委員：緒方啓典、西尾健、石垣隆正、水澤直樹、大島研郎である。
- ・開催状況と議題等は下記のとおりである。
 - 第一回：4月18日（火）
議題：委員長の選出・2017年度自己点検・評価活動について
 - 第二回：5月15日（月）
議題：自己点検・評価シートについて
 - 第三回：2月26日（月）
議題：自己点検年度末報告について・質保証委員による点検・評価について
 - 第四回：3月5日（月）
議題：年度末報告最終案のとりまとめ

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・2016年度から自己点検作業における執行部会議と質保証委員会の役割をより明確に分け、厳格なPDCAサイクルを担保する体制で実施した。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

生命科学部質保証委員会は、学部長、教授会主任、教授会副主任、3学科より選出された委員3名の計6名で構成され、2017年度は委員会が4回が開催されている。開催時期や議題からは、委員会の立ち上げは年度初めに迅速に行われ、ある程度の時間的余裕をもって執行部の作成した自己点検書類の確認が行われていることや質保証委員会の年度末報告案がとりまとめられていることが読み取れ、質保証委員会は適切に活動している。また、自己点検作業の際の執行部会議と質保証委員会の役割が明確に分けられている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

3 教育課程・学習成果

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

【学位授与方針】

生命科学部は、以下の能力を備えた学生に学位を付与する。

1. 英語科目、教養科目、理系教養科目単位を修得し、幅広い知識を有する。
2. 学部内の共通専門科目の履修を通じて生命科学および化学の学際的知識と総合的視野を有する。
3. 専門実験・実習科目を履修し実践的な課題解決能力を有する。
4. 卒業研究、課題研究を履修しコミュニケーション能力、問題解決能力を備える。

各学科の学位授与方針は次の通りである。

<生命機能学科>

1. ゲノム・タンパク質・細胞を中心とする専門的知識を身につけた上で、生命科学の総合的理解ができる。
2. 広い学問的視野、論理的思考能力、実践的な課題解決能力を備えている。
3. 日本語、英語を問わずに情報を収集し、自立的に考え、それを論理的に説明できる能力を備えている。

<環境応用化学科>

1. 化学に関する専門知識の習得とそれを生かした問題解決能力を備えている。
2. 化学に関する実験操作を自ら行い、その結果を正当に評価し、論理性ある結論が導きだせる能力を備えている。
3. 日本語、英語を問わずに豊かなコミュニケーション能力を備え、自らの意見を論理的に説明できる能力を備えている。

<応用植物科学科>

1. 様々な植物病について、的確に診断・予防・治療できるための専門的知識とその遂行能力が備わっている。
2. 食の安全や環境についての知識を持ち、植物保護の技術を理解しリスク評価を行える総合的能力を有する。
3. 専門教育で得た知識を活用し、さまざまな分野で新しい科学や技術が現代社会に与える影響を自らの力で正しく評価し、その内容の正確な伝達ができる説明能力が備わっている。

①学部（学科）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（卒業要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。

はい いいえ

3.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

【教育課程の編成・実施方針】

生命科学部では、以下の特色を持つ教育課程を編成する。

1. 初年次教育として自立性やプレゼンテーション能力を涵養するための科目を設定する。
2. 英語科目、教養科目、理系教養科目の単位取得を卒業要件に含める。
3. 1年次より専門実験・実習科目を配して、早期より専門性を高める。
4. 学部内で共通履修できる専門科目を設け、専門分野での総合的科学家の見地を養う。
5. 各学科で学生の興味に合わせた専門性をより高めるべく3つの履修コースを設定する。

各学科の詳細な教育課程の編成とその実施の方針は以下の通りである。

<生命機能学科>

ゲノム・タンパク質・細胞に関連する科目を中心としてカリキュラムを編成し、生命を、個々の生体分子の機能が統合された現象としてとらえ、深く理解できるような専門科目を配置する。また、三履修コースとして、「ゲノム機能」、「タンパク質機能」、「細胞機能」を設け、学生の興味に合わせて高度な専門性を身につけさせる。全体としては次の点に配慮する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・初年次から実験・演習科目を設定する。
- ・研究室配属による課題研究・演習の履修を2年次から可能とし、理論・知識と実践的技術の相乗的効果によって高度な専門性の習得を推進する。
- ・学部内の教養科目、学科横断的な専門科目の複数の習得を推奨する。
- ・教員研修の結果をフィードバックさせ、履修指導や講義の改善を図り、きめ細かく柔軟性のある教育を遂行する。

<環境応用化学科>

化学に関する基礎科目を習得したのち、三履修コースを設け、より専門度を高めるようカリキュラムを配置する。三履修コースとして、「物質創製化学」、「グリーンケミストリ」、「環境化学工学」を設け、学生の興味に合わせて高度な専門性を身につけさせるとともに、卒業後選択する職業への指針を与えるよう配慮する。カリキュラム全体としては、次の点に配慮する。

- ・全学年に実験科目を配し、化学技術者および研究者としての基礎技術を身に付けさせる。
- ・初年次は、高校からの円滑な移行をはかるための教育およびキャリア教育を行う。3年次には卒業研究のための準備教育を行う。4年次には、卒業研究を課し、社会人、大学院進学への準備を徹底するよう、少人数教育に努める。
- ・公的資格取得のための教育にも配慮する。

<応用植物科学科>

植物、微生物と昆虫に関する、分子・細胞生物学からマクロな生態学まで配置し、併せて食料、環境、社会経済問題まで広範に、総合的な知識を修得可能なメニューを配する。特に、植物保護に関わる技術や資格取得のための知識修得の機会を設ける。三履修コースとして、「植物クリニカル」、「グリーンテクノロジー」、「グリーンマネジメント」を設定する。以下の点に配慮する。

- ・実験・実習を初年次から開始して、基礎訓練を行い、その後段階的に高度な診断・防除技術を修得するような実践的で、体系的な教育プログラムを設定する。
- ・公的資格（技術士補、樹木医補、自然再生士補）の取得プログラムを配置するとともに、植物関連の食料・環境・バイオ関連の企業・公的機関へのインターンシップを行う。
- ・関連する法令や制度、国際動向、関連ビジネスについての知識修得の場を設ける。

①学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
--	--

②教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。	<input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
--	--

【根拠資料】 ※冊子名称やホームページURL等。

- ・大学案内
- ・学部パンフレット
- ・学部ホームページ <http://www.hosei.ac.jp/seimei/>
- ・生命機能学科ホームページ <http://fb.ws.hosei.ac.jp/wp/>
- ・環境応用化学科ホームページ <http://chem.ws.hosei.ac.jp/wp/>
- ・応用植物科学科ホームページ <http://depcps.ws.hosei.ac.jp/wp/>

③教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。	S <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B
--	---

(～400字程度まで) ※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、検証プロセスを記入。

生命科学部執行部会議で適宜検証を行い、必要に応じて教授会に諮ることで教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性を検証し、2016年度には、全学で依頼された3つのポリシー見直し作業に従い、生命科学部3学科とも学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を見直し、改訂をおこなった。さらに、各学科の教室会議においてきめ細かい検証を行っている。生命機能学科においては、新カリキュラム（2013年改訂）で学んだ卒業生を2016年度に引き続き送り出した。新カリキュラムでは、専門科目を体系化したことに加え、より柔軟な研究室配属時期の選択を軸とした改訂により、効果的な教育・研究を目指している。その教育効果をはかる指標の一つとして大学院進学率をモニターしているが、新カリキュラムで学んだ卒業生の本学大学院進学率は上昇傾向にある。今後も中長期にわたってカリキュラム改訂がもたらす教育効果について総合的に検証する。環境応用化学科では、ほぼ毎週教室会議を開催し議論をおこなっている（2017年

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

度は 43 回)。応用植物科学科では、技術士一次試験合格者、樹木医補および自然再生士補登録者を把握することで、教育課程の編成・実施方針の適切性を分析している。また、学生の就職状況を分析し、社会状況の変化と対応について評価・検討している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

3.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。

S A B

(～400 字程度まで) ※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

学生が問題意識をもち、自ら学ぶ自立性を涵養するために、1 年次からの実験・演習科目を導入している。学びの意欲を上げるために、各学科とも優秀卒論や資格の合格に対し、表彰を行っている。生命機能学科では、「生物化学」「分子生物学」「細胞生物学」「生物物理学」分野の講義を担当する専任教員が、講義内容を綿密に協議・検討して分担化し、体系的なカリキュラムを設定している。研究に対して高い意欲をもつ学生に対しては、2 年次から「ゲノム」、「蛋白質」、「細胞」のいずれかの分野の研究室に所属し、講義と並行して研究を行うことも可能にしている。希望すれば 4 年次まで同じ研究室で研究を継続することができる。環境応用化学科では、生命科学部賞を設立して、公的資格試験(採用試験)合格者等を毎年表彰している。「基礎応用化学実験」、「応用化学実験 IAB、IIAB」、「卒業研究」および演習科目を各学年に設置し、自ら学ぶ能力の育成に力を入れている。応用植物科学科では、樹木医補、自然再生士補、技術士補などの各種資格の取得に向けた科目を実施するとともに、公務員受験対策コースの設定やインターンシップを必須科目とするなど、社会が求める人材の育成に努めている。

【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページ URL や掲載冊子名称等

- ・生命科学部履修の手引き
- ・生命機能学科教室会議議事録
- ・生命科学部賞募集要項

②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。

S A B

(～600 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修(個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ(必修・選択等)含む)への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。

「カリキュラム・ポリシー」に基づき、各学科では 3 つの履修コースを設定し、カリキュラムマップで順次性を含め体系的な教育課程を明示している。

生命機能学科：ゲノム機能コース、蛋白質機能コース、細胞機能コース

環境応用化学科：物質創製化学コース、グリーンケミストリコース、環境化学工学コース

応用植物科学科：植物クリニカルコース、グリーンテクノロジーコース、グリーンマネジメントコース

1、2 年次において各コースに進むための基盤となる重要な講義科目・実習科目は必修化し、3、4 年次における発展的な専門科目は学生の興味に応じ選択化するなどの配慮を行っている。専門教育の接続科目として、物理学基礎、化学基礎、生物学基礎、微分積分学及び演習・線形代数学及び演習、科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲなどの理系教養科目が適切に配置されている。科学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは選択科目であるものの専門科目への導入の役目を果たす重要な教養科目であるが、環境応用化学科では履修率が過去 5 年間平均 99%と、ほぼ必修に近い扱いとしており、生命機能学科においても 2 年生から研究室配属を希望する学生には修得を義務づけることにより、ほぼ全員が履修するシステムを作った。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・学部ホームページ <http://www.hosei.ac.jp/seimei/>
- ・生命機能学科ホームページ <http://fb.ws.hosei.ac.jp/wp/>
- ・環境応用化学科ホームページ <http://chem.ws.hosei.ac.jp/wp/>
- ・応用植物科学科 <http://depcps.ws.hosei.ac.jp/wp/>
- ・生命科学部履修の手引き

③幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。

S A B

(～400 字程度まで) ※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2012年度には、小金井リベラルアーツセンターが設置され、生命科学部と理工学部の教養教育科目の実施に際して調整等をおこなっている。各学科とも初年次科目を指定し、幅広い教養が身につくよう配慮している。また、卒業研究を通して自立性やプレゼンテーション能力を涵養できるようにしている。また、2017年度に純増で生命科学部所属の数学担当と英語担当の教養教員が着任した。このことにより、生命科学部にふさわしい教養数学・英語教育をコーディネートする体制が整いつつあり、数学の授業担当者と対象学科との緊密な連絡も行われるようになった。生命機能学科では、早い時期から研究室に所属できるというカリキュラム上の特色を生かし、研究を通して総合的な判断力を育成している。同時に、研究室におけるコミュニケーションを通して社会性を身に着ける機会を与えている。環境応用化学科では、1年次春学期の必修科目「応用化学基礎」を通して教員と学生が密接なつながりをもつことができ、初学年次の間人間形成に役立っている。さらにチューター制度により上級生と交流する機会を設けることで、学習意欲の向上のみならず人間形成にも役立っている。さらに、大学院修了後に企業で活躍する卒業生との情報交換の機会を定期的に設け、人的ネットワークの構築を行っている。応用植物科学科では、実験・実習科目（1、2、3年次必修）では、学生参加、問題解決、対話型の授業を、インターンシップ（2年次必修）では対話型、学生参加型（インターンシップ体験発表）の授業を実施しており、総合的な判断力や豊かな人間性を養うことに努めている。

【2017年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2017年度に純増で生命科学部所属の数学担当と英語担当の教養教員が着任した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部教授会議事録
- ・法政大学生命科学部設置の趣旨等を記載した書類
- ・各学科教室会議（教員会議）議事録
- ・応用植物科学科インターンシップ先一覧
- ・応用化学科キャリア講座案内ポスター、応用化学基礎シラバス

④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。

S A B

(~400字程度まで) ※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。

初年次教育として、入学時にプレースメントテストおよびTOEIC-IPテストを実施し、クラス分けを行っている。推薦入試制度を通して入学した学生に対しては、入学前教育としてeラーニングの履修を課している。2017年度は学務と学科主任からそれぞれ独立に、eラーニング受講を昨年度以上に徹底して呼び掛けた。さらに、付属校入学予定者向けガイダンスで、各学科主任より春休み期間に行う課題を課した。また、高校で「物理学基礎」「化学基礎」「生物学基礎」を履修しなかった学生を対象に、これらの科目に対応する理系教養科目を開講し、大学で必要な理科の知識の修得を図っている。生命機能学科では、1年次のガイダンス時に、必修実験演習科目のテキストとして「生命機能学実験の手引き」を配布している。このテキストには、実験の技術的な内容だけでなく、生命科学と英語の学習法、作文技術などについても掲載し、その内容についての講義も行っている。環境応用化学科では、1年次の必修科目「応用化学基礎」「応用化学入門」を通して導入教育を行っている。応用植物科学科では、初年次にレポートの作り方や資料の収集方法など、基本的な作業について教育を行っている。

【2017年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・特になし

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部履修の手引き
- ・各学科教室会議（教員会議）議事録
- ・生命機能学科 生命機能学実験の手引き
- ・生命機能学科基礎実験 I/II・基礎演習 I/II シラバスと予定表
- ・環境応用化学科 応用化学基礎、応用化学入門シラバス
- ・応用植物科学科アンケート

⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。

S A B

(~400字程度まで) ※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

夏季および春季のSAプログラムを実施するとともに、定期的にTOEIC-IPテストを実施して、そのスコアを教室会議で評価・議論している。また、2014年度よりERP科目を卒業単位として認定（12単位を上限）した。ERPについてガイダンス等で周知を図り参加を強く推奨している。さらにSGU採択に伴い、2017年度より各学科の専任教員が参画するグローバ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

ルオープン科目（英語で自然科学を教授する）を設定し、開講した。また、英語による専門科目の設置についても検討を行っている。特筆すべき実践として、生命機能学科では、1年次（秋学期）～2年次（春学期）には基礎科学英語を、3年次（秋学期）～4年次には科学英語を必修科目として少人数クラスで実施している。基礎英語についてはTOEIC-IPテストの成績に基づいたクラス分けをすることにより、学生の能力に応じたきめ細やかな教育を行っている。また、来日した海外の研究者によるセミナーを開催し、学部全体に公開している。環境応用化学科では、全教員が英語を取り入れた講義に取り組んでおり、教材・小テストを英語化するなど、国際性を養うための教育に取り組んでいる。また、新年度の学生向けガイダンスにおいて、SA参加者に体験談を語ってもらうことで、SAへの参加を推奨している。応用植物科学科ではSA、ERPなどの英語教育を積極的に推奨している。その結果、2017年度から本学科学学生2名が派遣留学生として留学中であり、2018年度も2名が派遣留学生として留学予定である。また、本学科学学生1名が第3回世界若者農業サミット（ベルギー、バイエルクロープ社主催）に日本代表として選出され、現地にて活動報告をおこなった。

【2017年度に変更や改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・グローバルオープン科目として各学科から5名の専任教員が参画する「Introduction to Biology and Chemistry for Sustainability I」を設定し、開講した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部履修の手引き
- ・生命科学部 ERP、SAの実績、アンケート調査
- ・生命機能学科国内外研究者によるセミナー件数
- ・応用植物科学科 第3回世界若者農業サミット関係書類

⑥学生の社会的および職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。

S A B

(～400字程度まで) ※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

学生に対して効果的な理系キャリア教育を実施するために、執行部、各学科就職担当教員がキャリアセンターと連携する体制を確立している。学部の理念に掲げる「統合的視野を持った実践的研究・技術者の育成」を実現するために、キャリアパスの第1段階として大学院進学を重視し、2016年度よりキャリアセンター主催で開催されている「理系進学ガイダンス」において、生命科学部は講演内容を吟味し、学部生へ参加を呼びかけるなど実施に協力している。生命機能学科では、3年生を対象に「進学説明会」と「就活説明会」を開催している。進路選択の判断材料を与えるため、研究者・技術者として活躍している大学院修了生に自身の体験を話してもらっている。環境応用化学科では、1年次の必修科目「応用化学基礎」において、専門家によるキャリア教育を全3回実施し、社会的・職業的自立を志向した学ぶ意欲の育成を行っている。応用植物科学科では、キャリア教育の一環として、技術士試験対策、樹木医補、自然再生士補に向けた科目を初年次から受講するように指導している他、「植物医科ビジネス論」（2年生）、「植物医科学法論」、「知的財産総論」（3年生）などの実践的科目を配置している。また、農水省担当者による業務内容説明会、卒業生によるキャリア説明会、卒業生進路状況の説明を随時行っている。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部履修の手引き
- ・各学科教室会議（教員会議）議事録
- ・生命機能学科 生命機能学実験の手引き
- ・生命機能学科基礎実験 I/II・基礎演習 I/II シラバスと予定表
- ・環境応用化学科応用化学基礎シラバス
- ・応用植物科学科アンケート

3.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

①学生の履修指導を適切に行っていますか。

S A B

【履修指導の体制および方法】 ※箇条書きで記入。

- ・各学科の入学時、学年別および留級生ガイダンス等において、理系教養科目の履修法など、幅広い科学の素養を身につけるためのポイントを丁寧に指導している。
- ・生命機能学科では、理系教養科目（化学、物理学、数学等）の積極的な履修を、教務担当教員が中心となって指導している。また、専門科目についてもカリキュラム・ポリシーに基づいた3つの履修コースの履修モデルを提示している。また2017年度には、新しい試みとしてFB（生命機能学科）セミナーを開催し、研究講演と懇談会を実施して最先端の研究に触れることで学習意欲を活性化させることを目指した。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・環境応用化学科では、1年次春学期の「応用化学基礎」において、履修登録予定表を担当教員が確認し、履修に関するきめ細やかな指導をしている。特に、理系教養科目（化学、物理学、数学）の履修を強く推奨している。さらに、留級生を対象とするガイダンスをおこない、親身な履修指導を実施している。
- ・応用植物科学科では、各学年に対して2名ずつの教員を「学年担当」として配置するとともに、チューター制度を活用することによってよりきめ細かい履修指導を実施している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各学科ガイダンス資料
- ・生命科学部履修の手引き
- ・環境応用科学科履修登録予定表
- ・環境応用化学科応用化学基礎シラバス
- ・応用植物科学科役割分担表

②学生の学習指導を適切に行っていますか。

S A B

(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。

生命科学部では、全専任教員がオフィスアワーを設定して学生の個別指導に当たるとともに、各学科に学生問題担当教員をおき、成績不振学生等の調査・対応を主導している。生命機能学科では、1～3年生の各学年の担任教員および基礎実験演習担当教員を設定し、基礎実験、演習科目等の実践的教育を行う際の、学生の学習上の問題に対応している。卒業研究については、学生の研究の進行度に合わせて成果発表を口頭またはポスターから選択できるようにし、論理的な説明法の習得と、多くのディスカッションを通じた論理的思考能力の育成を行っている。環境応用化学科では、教員は「応用化学基礎」の時間やオフィスアワーを用いて、きめ細かな学習指導をおこなっている。特任教育技術員は分担して主要講義・実験・演習科目に出席することで、その講義内容を把握し、学生からの質問等に対応できる体制を整えている。さらにTAがこれらをサポートする体制をとっている。応用植物科学科では、オフィスアワーを用いた個別指導のほか、成績不振者については教員会議で情報を共有するとともに、学生問題担当教員が優先的にケアしている。また、各学年の実験実習科目の指導は学年担当の特任教育技術員（2名）と教務助手（2名）が実験技術指導を担当するほか、全学年を通じて教育技術嘱託（1名）が植物栽培管理指導を行う体制をとっている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部履修の手引き
- ・生命機能学科 各種委員リスト、ガイダンス資料、卒業論文発表会プログラム
- ・生命機能学科教室会議（教員会議）議事録
- ・基礎応用化学実験、応用化学実験 IAB、IIAB テキスト

③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。

S A B

(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。

生命機能学科では、1、2年次の基礎実験・演習・科学英語の科目において、統一テストを行い、各自の達成度を学生に認知させ、予習・復習の指標を提示している。環境応用化学科では、専門科目において毎回課題を課す、講義開始前に前回の講義の内容の小テストを随時行うなど予習、復習をおこなわせる工夫をしている。また、各科目で授業支援システムを活用し、授業に関連した資料を授業の前後で学生に配布するなど授業の予習・復習がおこなえる様、十分に配慮している。応用植物科学科では、次週の学生実習での実習内容を予習するための課題を課し、予習を行わせる工夫をしている。また、学生実験室の空き時間には実験室を解放して、学生実習作業の復習時間に充て、教員や学科が保有する専門図書閲覧可能として、予習・復習が可能な学習環境を整えている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命機能学科 生命機能学実験の手引き
- ・生命機能学科基礎実験 I/II・基礎演習 I/II のアチーブメントテスト（統一テスト）
- ・生命機能学科基礎英語 I/II のアチーブメントテスト（統一テスト）
- ・有機化学 I・II シラバス

④1年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行っていますか。

はい いいえ

【履修登録単位数の上限設定】※1年間又は学期ごと、学年ごと等に設定された履修単位の上限を記入。

春学期、秋学期各々について30単位を超えて履修登録することができない。2014年度以降の入学生は、年間の合計が49単位を超えて履修登録することができない。ERP、グローバル教育センター主催科目、グローバルオープン科目は自由選択科目として、卒業所要単位数に算入するが、12単位を超えて履修・修得することができない。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>【上限を超えて履修登録する場合の例外措置】※履修登録単位数の上限を超えて履修できる場合、制度の概要を記入。</p> <p>科学技術コミュニケーション演習、および卒業要件とならない教職科目や資格科目は、履修制限の対象外となる。2年次以上の成績優秀者は、他学部科目履修者制度により、年間4科目(かつ)8単位以内を上限として本制度に参加している学部の対象科目を履修することができ、この範囲であれば、例外的に上限を超えて履修登録することができる。</p>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命科学部履修の手引き 	
⑤教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>【具体的な科目名および授業形態・内容等】※箇条書きで記入(取組例:PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命機能学科では、2年次から配属された学生には「生命機能学研究論文」の履修と口頭による卒業研究の成果発表を、3年次から配属された学生にはポスターによる成果発表を推奨している。これにより、卒業研究全体のレベルを落とすことなく、学生の意欲に応じた高い専門教育が行えるようになった。また、ポスター発表形式を導入した事により、他学科の教員を含めた多くの聴講者を集めることになり、広い学問的視野の育成に効果が期待できるようになった。 ・環境応用化学科では、講義科目と実験科目の関連性を検証している。予習や復習がいつでもおこなえるオンデマンド型の講義体制を取り入れることを目指して、授業支援システムを活用している。また、次年度以降の実験科目教育体制の刷新を教室会議にて決定した。 ・応用植物科学科では、1年生の学生実習において全員参加型の課題発表会、2年生では必修科目として全学生にインターンシップを実施、3年生では自ら研究計画を立て自主的に病害虫の診断を行う問題解決型の実習を実施するなど、学生参加型・対話型の教育を数多く取り入れている。また、学科内に開設している植物医科学センターの実践的な活動(植物病害虫診断事業)を4年次の卒業論文研究に生かすことで、問題解決能力に加えて、主体的に考える能力や社会的能力を育成する試みを行っている。 	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命科学部履修の手引き ・生命機能学科ガイダンス資料、2017年度卒業論文発表会プログラム ・生命機能学科基礎実験 I/II・基礎演習 I/II シラバスと予定表 ・環境応用科学科授業支援システム利用の試み ・環境応用化学科教室会議議事録 	
⑥それぞれの授業形態(講義、語学、演習・実験等)に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>(~400字程度まで) ※どのような配慮が行われているかを記入。</p> <p>生命機能学科では、基礎科学英語において能力別に18人程度以下の少人数クラスを編成している。また、基礎実験では10人以下の班に分けて実験を行わせている。研究室への配属にあたっては、各研究室に最大でも10名以下になるよう配慮し、各学生に個別の研究テーマを与えて指導をしている。環境応用化学科では1年次の「応用化学基礎」および3年次の「応用化学セミナー」において、教員によるきめ細かな指導をおこなうため、1教員当たり8名程度の学生数で授業を実施している。また、実験科目においては、学生が自律的に学ぶ教育内容および安全性を担保するため、1テーマ1回当たりの学生数を8名程度に絞っている。応用植物科学科では、1、2、3年生の実験・実習科目においては実験台当たりの学生数を最大7名以下に調整し、教育技術員、教務助手、TAによる指導が行き届くようにしている。また、研究室配属においては、各研究室への配属人数がほぼ均等になるように調整し、指導時間や研究スペースが過度に不足しないよう、配慮している。</p>	
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命機能学科教室会議議事録 ・環境応用化学科 基礎応用化学実験、応用化学実験 IAB、IIAB テキスト、応用化学基礎・応用化学セミナーシラバス 	
⑦シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>【検証体制および方法】※箇条書きで記入(取組例:執行部(〇〇委員会)による全シラバスチェック等)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生命機能学科では、2014年度より専任教員担当科目のシラバス原稿をウェブ上で閲覧する体制を構築し、相互チェックを実施している。2017年度は、学科主任と教務担当教員が全シラバスをチェックして検証をおこなった。2015年度より、専任教員と兼任講師がそれぞれ担当する科目の内容の適切性を検討するために懇談会を年に1回実施している。 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> 環境応用化学科では、2014年度より、教室会議で学科の全科目についてシラバスの記載内容をチェックし、常に検証する体制を取っている。また、兼任講師が担当する科目については、採用時にシラバスの提出を求め、教室会議にて記載内容を検証している。 応用植物科学科では、2014年度より教室会議で全科目についてシラバスの記載内容をチェックする体制を取っており、2017年度も全教員が参加してシラバスチェックをおこなった。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録 シラバスチェックの結果をまとめた執行部会議メンバー内でのメール文書 	
⑧授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。	はい <input checked="" type="checkbox"/> いいえ
<p>【検証体制および方法】 ※簡条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> 学期末に実施される授業改善アンケート（FD推進センター）に、授業がシラバスの記載に沿って実施されているか、確認する項目が設定されている。 生命機能学科では、授業改善アンケートのシラバス関係の項目の結果について教室会議で検証している。 環境応用化学科では、専任教員の担当する授業科目に関して、学期毎にシラバス通り授業がおこなわれたかの指標としてシラバス合致度をチェックし、シラバス合致率80%未満の科目については担当教員にその理由の説明を求めている。 応用植物科学科では、授業の初回に学生にシラバスを提示して授業を進めるとともに、授業改善アンケート中の、シラバスの内容が反映されているかどうかの項目に対する回答を検証することで改善を図っている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録 	
3.5 成績評価と単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>【確認体制および方法】 ※簡条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 成績評価の方法および基準は、期末試験や小テストなどの各要素の配分も含めてシラバスに明記され、学生へ周知されている。これらをもとに、授業の内容に応じて適切な単位認定が行われている。 成績評価結果については、学生からの異議申し立てが可能であり、そのシステムも確立されている。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 生命科学部履修の手引き 授業科目シラバス 	
②他大学等における既修得単位の認定を適切な学部（学科）内基準を設けて実施していますか。	はい <input checked="" type="checkbox"/> いいえ
<p>(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。</p> <p>現在は行われていない。近隣他大学との単位互換制度を望む意見もあり、実施に向けて、引き続き具体的な議論が必要である。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 特になし 	
③厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。</p> <p>現在のところ、講義科目については概ね各教員に任せられているが、成績評価方針を学生の個人情報の問題をふくめて検討する必要がある。生命機能学科では、全教員が担当する研究・実験・演習・科学英語科目については、予め学生に公表した基準に沿って学習態度や達成度等を点数化し、教室会議できめ細かく検討した上で成績評価を行っている。環境応用化学科では、1年次の導入教育科目および1～3年次の実験科目において厳格な採点基準を設けて採点をおこない、最終的に教室会議で詳細に検討し成績評価をおこなっている。また、各教員がおこなう授業報告においても、各科目の採点基準の確認をおこなっている。応用植物科学科では、特に実験・実習科目、植物医科学インターンシップの成績評価について教員会議の中で話し合われて全教員が確認し、評価を行っている。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業科目シラバス 各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録 	
④学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。	はい <input checked="" type="checkbox"/> いいえ
<p>【データの把握主体・把握方法、データの種類等】 ※簡条書きで記入。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・生命科学部ではすべての学科の就職状況を集約し、全体像を学部パンフレットに記載している。
- ・生命機能学科では、就職担当教員が学生の卒業後の進路について適宜調査し、教室会議における報告を通して、進学状況および就職状況は、全専任教員に共有されている。
- ・環境応用化学科では、学生の卒業後の進路についてゼミ単位で、就職担当教員が適宜調査し、教室会議で報告し、就職状況および進学状況は全専任教員が把握している。
- ・応用植物科学科では、3年生は夏休み前に研究室に配属され、担当教員はゼミ学生の就職内定や進学情報をリアルタイムで把握している。この情報は進路担当教員に報告し、集約された進路情報は卒業までの間に毎月学科全教員に伝達するシステムをとっている。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部パンフレット
- ・各学科教室会議（教員会議）議事録
- ・各学科進路調査

3.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。

はい いいえ

【**データの把握主体・把握方法・データの種類等**】※箇条書きで記入。

- ・生命科学部では各学科から進級状況の報告を受け、教授会で承認している。
- ・生命機能学科では、実験・演習・科学英語の成績について、全教員が参加する教室会議において、成績分布に配慮しつつ協議した上で判定している。また、学期末と年度末には、特に修得単位が少なく進級が危ぶまれる学生や、成績の低下した学生を抽出して個別に指導している。
- ・環境応用化学科では、実験科目の成績分布について検証し、全教員による成績判定をおこなっている。また、教室会議でおこなわれている授業報告を通して、各科目の成績分布および学生の理解度について全教員が情報を共有している。さらに年度末の教室会議において、全教員により提供された情報をもとに進級・卒業の判定をおこなっている。
- ・応用植物科学科では、実践的教育の要である実験科目について、全教員による成績判定を行っているほか、樹木医補、自然再生士補の認定養成機関であることから、資格取得に必要な科目の履修状況を常時把握・指導している。進級や卒業については、提供される情報を基に、教室会議で検討し個別指導している。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部教授会議事録
- ・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録

②分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。

S B

(～400字程度まで) ※取り組みの概要を記入。

生命機能学科では研究室配属授業の成績評価、発表会の成績を全教員が採点・集計している。環境応用化学科では、3年次の「応用化学セミナー」および4年次の「卒業研究」において、研究報告やディスカッションを定期におこなうことで、学習成果の進展をチェックしている。また、卒業研究発表会では、全教員が発表を聴講し、成績判定をおこなっている。応用植物科学科では、卒業研究発表会において、全教員による発表内容・態度の採点をおこない、相互に採点内容を確認することで、学習成果評価を適切に行っている。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・教室会議議事録

③具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。

S B

(～400字程度まで) ※取り組みの概要を記入（取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用等）。

生命機能学科では、1～2年次の実験・演習・科学英語については統一テストを行い、各学生の達成度を測っている。2～4年次に各研究室で取り組む課題研究では、その集大成となる「卒業論文」について、全専任教員が全ての口頭発表を審査・採点して、判定会議において採点結果をもとに評価を決定している。環境応用化学科では、授業科目の到達目標に関して、学期末定期試験において評価をおこなう。学期末定期試験が実施されない科目に関しては、授業時間内に課題を課し、回答結果を元に毎回評価をおこなうなどの方法により、学生の学習成果の測定をおこなっている。さらに、集中講義科目においては、授業時間内や授業終了後の一定期間にレポートを課すなどして適宜評価をおこなうことによって達成度評価を適切におこなっている。応用植物科学科では、GPAやTOEICの年次比較のほか、実験・実習科目におけるレポート内

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

容の確認・比較を行っている。また毎年、技術士一次試験合格者、樹木医補・自然再生士補の資格取得状況、学生による学会発表などを確認している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録
- ・各学科卒業論文発表要旨集
- ・生命機能学科統一テスト
- ・応用植物科学科 技術士第一次試験合格者数、樹木医補、自然再生士補登録者数

④学習成果を可視化していますか。

S A B

【学習成果可視化の取り組み】 ※取り組みを箇条書きで記入（取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等）。

- ・生命機能学科では、1～2年次に実験・演習・科学英語に関する統一テストを行い、定量性をもつ達成度として可視化している。また、学生による学会発表を推奨し、学会発表数を教育成果の一つとしており、2015年度より制定された理系学部学生国内学会発表補助を積極的に利用している。
- ・環境応用化学科では、学生の専門科目の理解度、キャリア教育による学生意識変化等についてアンケートを継続しておこない、学習成果の可視化をおこなっている。また、各教員の授業報告においては、各科目の成績分布を公表し、議論をおこなっている。また、卒業研究発表においては、「卒業論文要旨集」をとりまとめている。
- ・応用植物科学科では、年度ごとに技術士一次試験合格者数、樹木医補・自然再生士補登録者数を把握して、年次変動を確認している。また毎年度末には、教室会議において、学生の単位取得状況に関するデータを基に、学生指導に関する検討を行い、その方針に則った指導に全教員が取り組んでいる。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録
- ・応用植物科学科 技術士第一次試験合格者数、樹木医補、自然再生士補登録者数

3.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みも行っているか。

①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善に向けた取り組みを行っていますか。

S A B

(～400字程度まで) ※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

- ・生命機能学科では、入学時のプレースメントテストとTOEICの成績を、1、2年次の基礎実験・演習・科学英語科目で実施する統一小テストおよび期末テストの結果と比較・分析し、教育効果について議論・検証している。また、3年次の実験・演習・科学英語科目について学生にアンケートを行い、教育内容・方針の改善に資する情報の収集を行っている。
- ・環境応用化学科では、ほぼ毎週開かれる教室会議で教育内容、実施の問題点や教育成果について継続的に検証している。さらに、兼任講師懇談会を年1回開催し、兼任講師の担当講義科目についても教育成果について検証し、教育内容・方針の改善に資する情報の収集を行っている。
- ・応用植物科学科では授業改善アンケート以外に学科独自のアンケート調査を実施し、教員会議で結果を分析している。また、毎月2回程度開催される教員会議の中で、試験の成績や資格取得者数など教育成果に関する情報を共有化し検証しているほか、学業不振学生について原因の分析、保護者面談の実施を含めた対策を定期的に議論している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録
- ・生命機能学科アンケート調査
- ・環境応用化学科 化学系教員懇談会議事録
- ・応用植物科学科アンケート調査

②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。

S A B

【利用方法】 ※箇条書きで記入。

- ・授業改善アンケートの自由記述欄の詳細情報開示請求により、学部執行部が学部の全ての教養科目と専門科目について、授業の実施状況を確認している。
- ・生命機能学科では、学科独自の授業アンケートを実施し、集計結果を授業の検証と改善に役立てている。また、全学の授業改善アンケートの結果についても活用するよう各教員に確認している。
- ・環境応用化学科では、毎年4月に独自に1年生に対し、新入生アンケートを実施している。さらに、春秋学期の全学授業改善アンケートの集計結果を解析し、学生の気質、授業に対する興味、理解度等を知るための手がかりとしている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・応用植物科学科では、教員が学期の終わりと次の学期の初めの間に授業改善の目安として用いているとともに、学生の意見を取り入れて授業の改善に役立っている。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各学科教室会議（教員会議）開催記録・議事録
- ・生命機能学科アンケート調査
- ・環境応用化学科アンケート調査

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・2017年度に数学担当と英語担当、2018年4月には物理担当の生命科学部所属の教養教員が計3名純増で着任し生命科学部にふさわしい教養教育を編成する体制が整いつつある。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
生物、化学、体育に加えて、2017年度は数学と英語の教養教員が増員されたが、それらの科目間、および専門科目の教員間で有機的な連携が十分ではない。今後は、教養教員と専任教員の懇談会を開催し、より効果的な教養教育と、専門教育へのスムーズな接続について検討したい。	

【この基準の大学評価】

①方針の設定に関すること (3.1～3.2)

生命科学部の学位授与方針は、学部全体で共通の項目に加え、学科独自のものが3学科それぞれ設定されている。教育課程の編成・実施方針に関しても同様である。これらの周知・公表については、大学案内、学部パンフレット、学部ホームページ、各学科のホームページ等で行われている。内容は詳細かつ具体的であり、周知の方法も適切である。適切性の検証については、学生の就職状況の分析のほか、大学院進学率や資格試験の合格者や資格登録者数など、定量的な数値もモニタリングしながら行っていることは、感覚や局所的な経験に流されない検討や議論を行う上で、有用な方法であると判断できる。

②教育課程・教育内容に関すること (3.3)

生命科学部では、学習や研究に対する意欲の高い学生のニーズに応え、モチベーションを高める工夫と取り組みが随所に見られる。物理学・化学・生物学、数学などの理系教養科目の配置、専門に関する基盤系科目の必修化など、カリキュラムの順次性・体系性が確保され、推薦入学者に課す入学前教育、物理基礎・化学基礎・生物基礎未履修者に対する理系教養科目の開講、レポートの書き方や資料の収集方法に関する導入教育など、学生個々の学力や入学経路に合わせた初年次教育・高大接続が十分に配慮されている。TOEIC-IPテストの定期的な実施、教材や小テストの英語化への取り組みなど、国際性を涵養する教育が充実しつつある。チューター制度による上級生との交流、卒業生との情報交換会、インターンシップ体験発表などを通じて、総合的な判断力や豊かな人間性が涵養されるよう工夫され、内容を吟味した就職ガイダンスの実施、卒業生によるキャリア説明会、学部3年生を対象にした進学説明会と就活説明会の実施など、キャリア教育の場も適切に提供されている。

③教育方法に関すること (3.4)

生命科学部では、入学時および学年別ガイダンス等において履修指導が適切に行われ、各学科とも学年担当教員や教務担当教員をおき、きめ細かく指導を行っている。学習指導については、各学科におかれた学生問題担当教員が、成績不振学生等の対応を行っている。低学年の実験・演習・英語科目において統一テスト・小テストを適宜行うなど、予習・復習を行うように工夫されているほか、過度な履修を防ぐため、履修登録単位数の上限が1年間および学期毎に規定されている。学科毎に、教育上の目的達成のため効果的な授業形態を導入している。1授業あたりの学生数については、可能な限り少人数になるように工夫され、教員・教育技術員・教務助手・TAによる指導が行き届くように配慮されている。シラバスの点検は、各学科とも全シラバスのチェックを行っており、実際の授業内容との合致度は、授業改善アンケートやシラバス合致度のチェックなどによって検証されている。

④学習成果・教育改善に関すること (3.5～3.7)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

生命科学部の成績評価の方法と基準はシラバスに明記され、成績評価と単位認定を厳格に行うためのシステムが確立されている。他大学等における既修得単位の認定は行われていない。学生の就職状況は、学科によって就職担当教員ないしは進路担当教員がとりまとめ、学科・学部単位で把握されている。成績分布や進級状況は学科単位で把握され、教授会に報告されている。学習成果の測定と把握評価方法に関しては、セミナーや卒業研究の発表会において全教員が発表を聴講し、採点に携わることで評価の偏りを抑制し適切に行われている。学習成果の可視化は、統一テスト、専門科目理解度アンケート、学会発表数、資格試験合格者数等により行われており、学習成果の検証は教室会議等で定期的に行われている。授業改善アンケートについては、一部学科では独自アンケートを実施するなど、学科それぞれの方法で利用している。全ての教養科目と専門科目の授業改善アンケート自由記述欄は、詳細情報開示請求により学部執行部が把握し、授業の実施状況の確認に利用されている。

4 学生の受け入れ

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

【学生の受け入れ方針】

生命科学部では以下を学生の受け入れ方針とし、さらに学科ごとに詳細を定める。

1. 入学後の修学に必要な数学や理科（物理、化学、生物、地学）の基礎知識や基礎実験技術を備えている。
2. 入学後の修学に必要な言語能力（特に日本語・英語）と、社会や文化についての知識を有する。
3. 学問を貪欲に吸収し、科学技術の進歩を社会に生かそうとする積極性と意欲を有する。
4. 物事を論理的に幅広く考察することができる。

<生命機能学科>

21世紀の生命科学は、従来の枠組みを超える学際的な学問へと展開している。したがって、専門的知識を幅広くかつ正しく理解し、応用できることはもちろん、日本語および外国語を用いたコミュニケーション能力をもち、人文学や社会科学の素養を踏まえた幅広い視野をもつ人材が望まれる。本学科では、以下のような入試制度を設置して、さまざまな経路から熱意のある有為な学生を広く募集し、学生の多様性を高め、学生どうしの相互啓発を促し、教育効果の促進を図る。

- 一般入試(A方式入試、T日程入試、英語外部試験利用入試および大学入試センター試験利用入試)
A方式では、英語、数学と理科の成績によって、総合的学力を評価する。
- 推薦入試(指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試等)
出願書類及び面接等によって、基礎学力と学習意欲、生命科学に対する関心と自発性、創造性を評価する。
- 特別入試(外国人留学生入試、帰国生入試等)
出願書類及び面接等によって、十分な日本語能力と生命科学に関する基礎学力を有すること、生命科学に対する関心と自発性、創造性を評価する。

<環境応用化学科>

創造性を高め、相互に琢磨する教育環境を構築し、多様な素質を持った学生を受け入れるために、下記のような入試制度を設けている。入学後の学生の追跡調査により、これら入試制度のより適切な運用、改善に努めている。

- 一般入試(A方式入試、T日程入試、英語外部試験利用入試および大学入試センター試験利用入試)
A方式では、英語、数学と理科によって、基礎的な学力と、化学及び自然科学における問題解決能力を評価する。
- 推薦入試(指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試等)
出願書類及び面接等によって、基礎的な学力と学習意欲、化学への関心と、化学及び自然科学における問題解決への意欲を評価する。
- 特別入試(外国人留学生入試、帰国生入試等)
出願書類及び面接等によって、十分な日本語能力と化学に関する基礎学力を有すること、化学及び自然科学における問題解決への意欲と本学科への志望意思を確認する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<応用植物科学科>

植物は人類が地球上で生存していく上で必要不可欠な生物であるとの認識のもと、食料、資源、環境問題に関心を持つ意欲あふれる次のような学生を受け入れることを基本としている。

- ・最新の生命科学の知識を貪欲に吸収し、科学技術の発展を通じて社会に貢献しようとする学生
- ・現代社会のかかえる広範で深刻な問題を、柔軟な思考と実践的な能力を基礎にして解決しようとする研究・技術者を目指す多様な学生
- ・国際的な視野で食料、環境問題や、貧困や飢餓問題に勇敢に挑戦し、解決に向けて国際舞台で活躍しようとする意欲ある学生

●一般入試(A方式入試、T日程入試、英語外部試験利用入試および大学入試センター試験利用入試)

A方式では、英語、数学と理科が受験科目であるが、「数学」、「理科」の2教科のうち得点の高い1教科のみを合否判定に用いることによって、特定分野に秀でた能力を評価する。

●推薦入試(指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試等)

出願書類及び面接等によって、基礎的な学力と学習意欲、植物医科学への関心と、食料・資源・環境分野における問題解決への意欲を評価する。

●特別入試(外国人留学生入試、帰国生入試等)

出願書類及び面接等によって、十分な日本語能力や生命科学に関する基礎学力、食料・資源・環境分野における問題解決への意欲、および本学科への志望意思を有することを確認する。

①求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。

はい いいえ

4.2 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。

はい いいえ

(～200字程度まで) ※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

2014年度に1.14倍の入学者数の超過があったものの過去5年概ね適正な充足率となっている。入学者数が定員を超過した場合には、クラス分けを行って講義受講者数の適正化を行うとともに、学科ごとに超過分に依りて予算措置を講ずるなどして実験実習に支障が出ないようにしている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・教授会資料

定員充足率(2013～2017年度)

(各年度5月1日現在)

種別\年度	2013	2014	2015	2016	2017	5年平均
入学定員	212名	230名	230名	230名	230名	
入学者数	198名	263名	224名	243名	226名	
入学定員充足率	0.93	1.14	0.97	1.06	0.98	1.02
収容定員	812名	842名	872名	902名	902名	
在籍学生数	899名	928名	897名	935名	960名	
収容定員充足率	1.11	1.10	1.03	1.04	1.06	1.07

※1 定員充足率における大学基準協会提言指針

【対象】

- ①学部・学科における過去5年間の入学定員に対する入学者数比率の平均
- ②学部・学科における収容定員に対する在籍学生数比率

【定員超過の場合】※医学・歯学分野は省略

提言	努力課題	改善勧告
実験・実習を伴う分野 (心理学、社会福祉に関する分野を含む)	1.20以上	1.25以上
上記以外の分野	1.25以上	1.30以上

【定員未充足の場合】

提言	努力課題	改善勧告

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

すべての分野共通	0.9 未満	0.8 未満
----------	--------	--------

※2 定員充足率における私立大学等経常費補助金不交付措置の基準

年度	～2015	2016	2017	2018～
入学定員超過率	1.20 以上	1.17 以上	1.14 以上	1.10 以上
収容定員超過率	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上

4.3 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

① 学生募集および入学者選抜の結果について定期的に検証を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
---	---

(～400 字程度) ※検証体制および検証方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。

- ・ 学部執行部と入学センターの情報交換会により、入試結果を分析・検証するとともに、得られた分析結果を各学科が翌年以降の入試改善のために利用している。
- ・ 各学科の高大連携委員が入試経路（一般、センター、推薦）ごとに学生のその後の成績等を追跡し、入学選抜の適切性を検証するとともに、指定校設定を見直すなどの改善を行っている。
- ・ 応用植物科学科では、指定校推薦で入学した学生について GPA や TOEIC-IP、プレースメントテスト等の成績を追跡し、指定校設定を見直している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 入学センター情報交換会資料
- ・ 各学科教室会議（教員会議）議事録
- ・ 指定校推薦見直し委員会開催記録・議事録

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・ 入学者のミスマッチを防ぐために、執行部で3 付属校を訪問し、大学が期待する学生像について説明した。 ・ 付属校の理科に関する推薦要件を見直し理系コースのみの生徒が進学するような要件に変更し、2018 年度高校入学者から適用することとした。 ・ 法政二高で化学の模擬授業をおこなうとともに、理系進路説明会に参加し、教員と OB による学部説明会をおこなった。 ・ 理系4 学部（デ工、情報、理工、生命）と3 付属校理科教員の懇談会で学部から付属校側に学部の要望を伝えるなど情報交換をおこなった。 	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・ 2018 年度の一般入試では、受験者数が学部全体で減少し、入学者数については環境応用化学科で定員超過した一方、生命機能学科で定員を下回った。安定的に適正な入学者数を確保する方策を入学センターと連携しながら、検討する必要がある。 	

【この基準の大学評価】

学生の受け入れ方針は、生命科学部共通のものと同各学科の特性に応じた学科別のものが設定され、明確に定められている。定員充足率については、2017 年度は学部全体で 0.98、過去 5 年平均で 1.02 であり、年度単位や学科単位では多少の変動があるものの、学部全体では適切な水準で制御されている。入学者選抜の結果については、入試経路別に GPA やプレースメントテストなどの成績追跡調査を行い、指定校推薦を見直すなど、入学者の質の維持・向上に努めている。付属校との連携については、3 校訪問のほか、理科に関する推薦要件の見直し、高校教員との懇談会実施など、学部・学科が期待する人材像と実際に推薦される者とのギャップが少なくなるよう、地道で継続的な取り組みが行われている。

5 教員・教員組織

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

【求める教員像および教員組織の編制方針】(2011年度自己点検・評価報告書より)

理念・目的で示される「生命」、「環境」、「物質」の領域に応じて組織された2学科、2専修(生命機能学科生命機能学専修、同学科植物医科学専修、および環境応用化学科)での「ディプロマ・ポリシー」、「カリキュラム・ポリシー」、および「アドミッション・ポリシー」に立脚した教育研究を多様な形で学生に指導、支援できるように努める教員を求める。従って、教員組織の編制に関わる方針は、生命機能学専修では、「生体を構成するタンパク質・ゲノム・細胞から、生命をそれらの有機体として捉え、かつ、これらの学問領域での先進的教育と研究を実践できる教員」を、植物医科学専修では「植物医科学分野で最先端の知識・技量と豊富な経験を有し、資格取得のサポートもできるような実践的教育・研究を遂行できる教員」を求める。環境応用化学科では、「21世紀型先端化学を修めることができるような、グリーンケミストリーを基礎理念として、有機化学、無機化学、物理化学、環境化学、化学工学各分野をバランスよく習得していることを要件とし、更に、境界領域までカバーするような教員」を求める。このような教員像に基づき教員組織の編制がなされている。

①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにしていますか。

はい いいえ

【根拠資料】※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。

- ・生命科学部教員審査内規

②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在をどのように明示していますか。

【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】※箇条書きで記入。

- ・学部執行部は学部長、教授会主任、教授会副主任1名ずつよりなる。
- ・教学関係を含め重要な案件は、各学科主任および学部担当事務主任を含めた執行部会議での議を経た後に、教授会に上程して改めて議論し、決議する体制をとっている。
- ・学科の独自の問題に関しては、各学科の責任で検討が行われ、原則として全教員が参加する教室会議により意志決定がなされる。
- ・教養教育を担う組織として小金井リベラルアーツセンターがあり、学部組織と連携して教養教育の責務を担っている。

【明示方法】※箇条書きで記入。

- ・生命科学部内規集

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部内規集
- ・生命科学部教授会規程
- ・生命科学部執行部会議・教授会議事録

5.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

①学部(学科)のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。

はい いいえ

(~400字程度まで)※教員像および教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性、国際性、男女比等の観点から教員組織の概要を記入。

生命科学部には体育、英語、数学の教養教員が所属し、生命科学部にふさわしい教養教育と、専門教育にあたる専任教員と密接な連携をとって教育に当たっている。

生命機能学科の3分野別の教員数は、2017年5月現在、ゲノム分野が3名、蛋白質分野が3名、細胞分野が4名の配置である。今後の大学院卒や定年交代の人事、任期付き教員の期限後の人事に際しては、分野別の配置のバランスを保つよう配慮していく予定である。環境応用化学科では、3つのコース、すなわち「物質創製化学コース」、「グリーンケミストリーコース」および「環境化学工学コース」に分かれ、それぞれ、物理化学、有機化学、無機化学、環境化学および化学工学の5分野に対応する教員が担当している。今後、講義科目と実験科目の連携を密にして教育体制をより一層充実させるために、教務助手の定員枠の拡充が望まれる。植物医科学を支える分野である、菌類学、細菌学、ウイルス学、害虫学、生理学、社会科学の各分野の専門家からなる教員体制としている。このうち、2017年度末のウイルス学分野の教員の定年退職に伴い、2018年度から同じくウイルス学分野の専任教員を新規採用し、植物医科学分野の教育・研究レベルを損なわないようにした。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・法政大学生命科学部設置の趣旨等を記載した書類

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- ・生命科学部教員一覧
- ・法政大学ホームページ
- ・学部・研究科・各学科のホームページ・パンフレット
- ・2017年度専任教員数一覧

②教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。

はい いいえ

(～400字程度まで) ※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。

教員組織は、学部教員が大学院の主要科目を担当し研究指導を行う体制であり、連携が取れている。学部時代の研究テーマを大学院でも続けて行うことにより、高度な研究を行って学会発表するなど成果を挙げている。また、担当教員が許可することで学部4年生が大学院科目を「先取り」受講することが可能であり、連続性のある教育体制となっている。各学科においてそれぞれの教員が大学院業務を分担し、教員や大学院修士・上級生による大学院進学に関する説明会の実施など大学院教育との連携を推進している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・大学院 理工学・工学研究科要項
- ・生命機能学専攻・応用化学専攻入試結果

2017年度専任教員数一覧

(2017年5月1日現在)

学部(学科)	教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上必要専任教員数	うち教授数
生命科学	23	6	4	2	35	24	12

専任教員1人あたりの学生数(2017年5月1日現在): 27.4人

③特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。

はい いいえ

【特記事項】(～200字程度まで) ※ない場合は「特になし」と記入。

生命科学部では近年複数教員の定年による交代があり、その後任人事には年齢構成を配慮した人事が行われ、偏りは十分に改善された。引き続き、後任人事採用に当たっても、年齢に偏らないように配慮していく予定である。応用植物科学科では、学科設置準備委員会で2014～2017年度までの教員採用を決定しており、完成年度までに適切な配分の年齢構成となるように計画をたて実行してきた。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

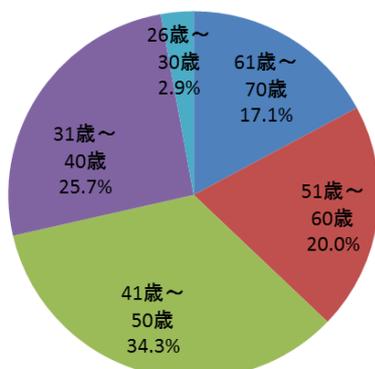
- ・生命科学部教員一覧
- ・生命科学部応用植物科学科設置の趣旨等を記載した書類

年齢構成一覧

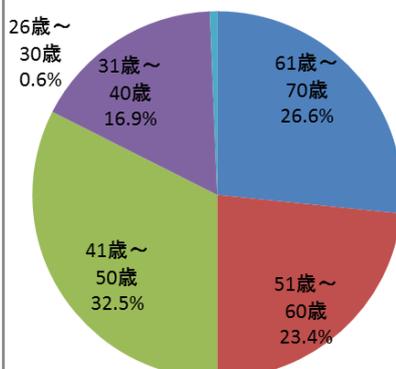
(2017年5月1日現在)

年度\年齢	26～30歳	31～40歳	41～50歳	51～60歳	61～70歳
2017	1人 2.9%	9人 25.7%	12人 34.3%	7人 20.0%	6人 17.1%

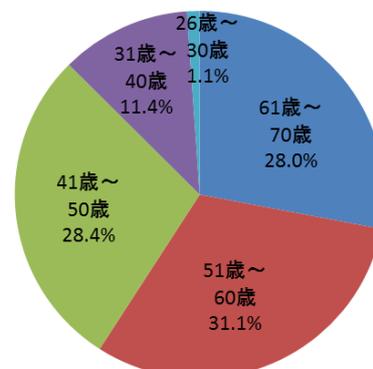
年齢構成比
(2017年度生命科学部)



年齢構成比
(生命科学部過去5年平均)



年齢構成比
(2017年度全学部平均)



5.3 教員の募集・採用・昇任等を適切に行っているか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

①各種規程は整備されていますか。	はい いいえ
【根拠資料】 ※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を箇条書きで記入。 <ul style="list-style-type: none"> ・生命科学部教員審査内規 ・生命科学部教員資格に関する内規 ・生命科学部教授、准教授および専任講師資格に関するガイドライン 	
②規程の運用は適切に行われていますか。	はい いいえ
【募集・任免・昇格のプロセス】 ※箇条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することでも可。 <ul style="list-style-type: none"> ・教員の採用（募集・任免）および昇格に関する審査は、「生命科学部教員審査内規」に従って、採用は原則公募によるものとする。 ・候補者については推薦委員会（5名以上の専任教員で構成）および人事委員会（各学科2名ずつの専任教員で構成され、当該学科以外の教員が委員長となる）を通じて二段階の精査を行う。 ・最終的に教授会で投票による議決（当該職位以上の教員が投票権をもつ）を行っている。 	
5.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	
①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。	S A B
【FD活動を行うための体制】 ※箇条書きで記入。 <ul style="list-style-type: none"> ・全学の「FD推進センター」で実施される授業改善アンケートに加え、各学科独自に授業アンケートを実施。 ・2011年度より授業公開を実施。法政大学の全教職員に対して公開しており、教員が相互参観を行うとともに、特任教育技術員、教育技術嘱託など技術系職員が参観。 ・FDアンケート等の結果を各教員にフィードバックし、授業の質の改善に活用するシステムを整備。 ・シラバスチェックシステムを各学科で整備。 【2017年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】 ※箇条書きで記入。 <ul style="list-style-type: none"> ・授業公開：2017年度は、春学期（6月5日～7月2日）と秋学期（11月6日～12月2日）に授業公開・参観を行った。春学期は公開93科目・参観22科目、秋学期は公開90科目・参観20科目であった。 ・シラバスチェック：年度末にかけて、学部で開講されている全専門科目について、生命機能学科では学科主任と教務担当の2名が、環境応用化学科と応用植物科学科では教員全員がシラバスチェックを実施した。 【2017年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 授業公開の意図について、兼任講師陣の理解が深まり、専任・兼任を問わずほぼ定着した。授業公開科目が春93、秋90科目と昨年度とほぼ同数が維持された。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 <ul style="list-style-type: none"> ・各学科授業アンケート ・2017年度授業相互参観実施報告書 ・執行部会議、教授会資料 ・各学科教室会議（教員会議）議事録 	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・2017年度4月に教養教育を担当する教員（数学と英語）を2名、理工学研究科生命機能学専攻の大学院教育に携わる任期付き教員1名を採用し、2018年度4月には物理系の教養教育を担当する教員1名を採用した。このことにより、より充実した教養教育および学部・大学院教育を推進できる体制となった。 ・2017年度に学部主催で新任教員によるセミナー、新任教員歓迎会を実施し、学科間の交流、相互理解を深めることにより、より充実した教員組織を構築することを図った。 	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・2018年度から採用される教務助手が日常業務を行いつつ、研究が可能な環境を整える方策については検討する必要がある。 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【この基準の大学評価】

生命科学部では、採用・昇格に関し、求める教員像および教員組織の編制方針が、学科単位で極めて明確に定められている。学部執行部、教室会議、教授会における役割分担と責任の所在は明確である。教員の配置に関しては、学部全体で体育・英語・数学などの教養教育担当教員を配しつつ、各学科の専門分野において、教員個々の専門が特定分野に偏らないよう、バランスを取った採用を行っている。先取り履修制度など、大学院教育との連携も考慮されている。年齢構成については、年齢バランスが近年大きく改善され、2017年度は30代・40代の教員が全体のそれぞれ約1/4、1/3を占めている。募集・採用・承認に関わる各種の規程は整備され、規程の運用も適切に行われている。全学の「授業改善アンケート」に加え、各学科独自の授業アンケートを行い、授業公開やシラバスチェック、アンケート結果のフィードバックにより、学部内のFD活動も適切に行われている。

6 学生支援

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 学生支援に関する大学としての方針に基づきとしての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

①卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。 はい いいえ

【データの把握主体・把握方法・データの種類の等】※簡条書きで記入。

- ・生命科学部では、執行部会議・教授会で卒業・卒業保留・留年者および休・退学者が報告され、状況が把握されている。
- ・生命科学部では、卒業論文の提出および発表が学位取得に必須であり、全教員の判定のもとに適切に行われている。
- ・退学、休学については教室会議で報告され、留年する学生については、年度末の教室会議において確認され、次年度の留級生ガイダンス時に適切な指導を行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・執行部会議、教授会議事録
- ・各学科教室会議（教員会議）議事録

②学部（学科）として学生の修学支援をどのように行っていますか。 S A B

(~400字程度まで) ※修学支援の取り組みの概要を記入（取り組み例：クラス担任、オフィスアワー、学生の能力に応じた補習・補充教育、アカデミックアドバイザーなど）。

生命科学部全教員がオフィスアワーを設定しており、その時間帯は教員に対して学生が自由に相談できるようになっている。また、学生がより気軽に相談できるように、上級生が下級生を教えるチューター制度を設定している。さらに実験実習科目を中心として大学院生が学部生をきめ細やかにサポートするティーチングアシスタント制度も実施している。生命機能学科では、1、2、3年生のクラス担任と実験・演習科目の担当教員を置き、学生と高頻度で顔を合わせ、教員側の窓口としての役割を担っている。また、これとは別に学生担当教員が個々の学生の成績などを調査し、規定単位の取得が危ぶまれる学生や成績が低下しつつある学生などについて、面談や必要に応じた保護者への連絡などを行い、学生が留級に至らないようサポートを行っている。環境応用化学科では3、4年次での指導教員の割り当てに加えて、1年次には8名程度ごとのクラス担任制度を導入している。また、特任教育技術員が主要講義科目、実験・演習科目に出席し、それぞれの教育内容を把握しており、教員だけでなく特任教育技術員も学生からの質問に対応できる体制を整えている。応用植物科学科では、1、2、3年生のクラス担任と実験・実習科目の担当教員を割り当て、高頻度かつ緊密に指導している。特に、1年生に対する生産実習においては、作物の病害虫発生調査・管理等を1時限前に教員、特任教育技術員、教務助手が高頻度に指導している。また、教員会議において、成績不良学生、休みがちな学生の情報を共有し、成績調査、個人面談などの就学支援サポートを行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・生命科学部履修の手引き
- ・学科教室会議（教員会議）議事録
- ・応用化学基礎シラバス、基礎応用化学実験、応用化学実験 IAB、IIAB テキスト

③成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。 S A B

【成績不振学生への対応体制および対応内容】※簡条書きで記入。

- ・生命科学部では、2014年度より「累積 GPA が 1.0 以下または学習態度や達成度に重大な問題があると認められる者」を成績不振学生と定義し、とくに注意して対応している。「学習態度や達成度」に関しては、修得単位数、授業への出席率、

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

レポート等課題提出状況、GPA をもとにして総合的に判断する。とくに、必修の実験実習科目の出席状況やレポート等課題提出の状況は、学生の学習意欲と理解度をリアルタイムに反映する重要な指標と考えているため、学期途中にも適宜モニターして対応する。この対応のため、各学科に学生担当教員をおいている。

- また、学習態度、学習能力に大きな問題を抱える学生に対して、学科だけではなく、学務課、学生センター、学生相談室、障害学生支援室と連携する体制を整え、学習に困難を抱える学生に対して多角的な観点から手厚くサポートしている。
- 生命機能学科では、学生担当教員は、学科主任等と連携して、上述の基準から問題となる学生と留学生についての調査・対応を主導する。当該学生に対しては、メールもしくは文書による本人への注意喚起、個人面談、郵送による保証人への通知を含めた個別指導を行う。学生担当教員と基礎実験演習担当教員を中心に、成績不振な学生の状況を教室会議で共有するとともに、必要に応じて個別に面接を行い、きめ細かい指導をしている。また、成績不振など問題を抱える学生の状況は出来る限り学務課とも共有している。
- 環境応用化学科では、成績不振な学生の情報を教員間で共有し、必要に応じて各教員が面談おこなうなど適切な指導をおこなっている。また、年度始めに留級生ガイダンスを実施し、成績不振な学生へのサポートをおこなっている。
- 応用植物科学科では、教室会議で「GPA1.0 以下の学生、実験実習（全 14 回）で 4 回以上欠席した学生、実験実習でのレポート未提出者、1～3 年生の進級要件を満たしそうでない単位少修得者、4 年生の卒業要件不足見込み者」などを成績不振学生としてリストアップし、全教員で情報を共有した上で、優先的にケアしている。また、「学生問題担当教員」を設置し、各学年担当教員 2 名、さらに必要に応じて学務課・学生生活とも連絡をとりつつ、成績不振者を指導している。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- 各学科教室会議（教員会議）議事録
- 環境応用化学科留級生ガイダンス案内

④学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。

S A B

（～400 字程度まで）※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。

生命科学部では、例年選出するチューターの中から、国際ボランティア意識の高い学生を、主に留学生を対象とするチューターとして設定した。生命機能学科では、日本語能力を含めた様々な背景をもつ留学生に学科主任が中心となって個別に修学支援をおこなった。その情報は学科会議で共有され、必要に応じて留学生の保護者に母国語に翻訳した手紙で修学状況を報告した。環境応用化学科では留学生について教室会議で情報共有を行い、各科目でのサポートに活かしている。応用植物科学科では、2016 年度入学のベトナム人留学生（博士課程）に対して、引き続き、学科を挙げて修学支援に力を入れている。

【2017 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

- 主に留学生を対象とするチューターを設定した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- 生命科学部教授会議事録
- 小金井企画・調整会議議事録
- 小金井学生相談・支援室運営委員会議事録
- 学科教室会議（教員会議）議事録

⑤学部（学科）として学生の生活相談に組織的に対応していますか。

S A B

（～400 字程度まで）※学生の生活相談に関する取り組み概要を記入。

生命科学部では副主任が学生問題担当の窓口となり、学生生活課と連携しながら、学生から相談事があった場合に対応している。必要に応じて相談内容を執行部 3 役のミーティングで学部長、教授会主任に報告し、情報共有している。生命機能学科では、学生担当教員と学科主任および各学年担当教員が学生からの生活相談に対応する体制をとっている。また、その内容について必要なものは、学科内の会議で共有し、最適な対応がとれる体制にしている。環境応用化学科では「応用化学基礎」、「応用化学セミナー」、「卒業研究」において、指導教員が親身に相談にのっている。応用植物科学科では、学生から各学年担当教員に挙げられた相談内容は、学科教員会議において学科教員で共有し、対応を議論したのち、学年担当教員から学生への指導をおこなっている。相談内容が教員では対応が難しい場合は、学生相談室への相談を指導している。いずれの学科においても、学生相談室のカウンセラーによるメンタルヘルス等に関する講演を主に 1 年生向けに行っている。

【2017 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

学生相談室カウンセラーに学生対象に話をしてもらった。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・学生相談室カウンセラーの講義資料（パワーポイント） ・学生相談室のパンフレット

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・主に留学生を対象とするチューターを設定した。 ・学生相談室との連携を強化した。 	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

<p>生命科学部の卒業・卒業保留・留年者および休・退学者の状況は、執行部会議と教授会で報告され、全専任教員が把握できるようになっている。修学支援については、教員のオフィスアワー、学部上級生による学生チューター、院生によるTA制度など、教職員、学生を問わずサポートにあたる体制が整備されている。成績不振者に対するケアは、学生担当教員や特任教育技術員などが状況を把握し、クラス担任とも連携して対応を行っている。特に必修の実験実習科目の出席状況やレポート等課題提出状況を適宜モニターし、各学科におかれた学生担当教員が対応している。外国人留学生の修学支援については、学科毎に方法は異なるものの、学科主任や留学生を対象とするチューターが対応にあたっている。学生の生活相談に関しては、学生担当教員、学科主任、学年担当教員などが対応にあたるようになっている。本点検項目すべて、組織的に丁寧な対応が行われている。</p>
--

7 教育研究等環境

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

7.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。	
①ティーチング・アシスタント（TA）、リサーチ・アシスタント（RA）、技術スタッフなどの教育研究支援体制はどのようになっていますか。	S A B
<p>(～400字程度まで) ※教育支援体制の概要を記入。</p> <p>実験・演習等において学生に対するTAの教育支援体制が設けられている。また特任教育技術員が教育研究支援を行っているが、2018年度からは研究も行う教務助手が学生に対する高度な支援を行う体制を整備した。応用植物科学科では、2017年度は4名の特任教育技術員により業務をおこなったが、2017年度末での任期満了による2名の退職にともない、2018年度からは2名の教務助手を採用し、高度な教育研究支援体制を整えた。</p> <p>【2017年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・技術職の新たな職種として教務助手制度を整備し、より充実した教育支援体制を整えた。 <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教務助手 規定 	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・技術職の新たな職種として教務助手制度を整備し、より充実した教育支援体制を整えた。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・教務助手の採用枠は、特任教育技術員と技術嘱託を合わせた勤務時間数によって限定されている。しかし、生命科学部の高度な教育を実践するには、少なくとも各研究室に一人の採用枠が必要である。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【この基準の大学評価】

生命科学部では、実験・実習科目のTAによる教育支援に加え、特任教育技術員による教育・研究支援が従前から行われている。さらに2018年度からは、研究も行う教務助手を採用し、支援体制の充実化を図っている。人員や予算の都合上、満足な人員数とは言えないながらも、様々な制約をうまく乗り越えて各種の教育・研究支援体制が整備・運用されている。

8 社会連携・社会貢献

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

8.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研究成果等を適切に社会に還元しているか。

①学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
--	---

(～400字程度まで) ※取り組み概要を記入。

各教員が積極的に他大学、企業、研究所と連携して共同研究を実施し、より高度な研究教育が実施できるよう努めている。生命機能学科では、生命機能学基礎実験の授業プログラムに企業の担当者、JAXA 研究員による講義を組み込んでいる。環境応用化学科では3年次に「インターンシップ」のプログラムを開設している。また「環境応用化学セミナー」において、学外の講師に講演を依頼している。応用植物科学科では、都道府県の研究所や関連企業とともにインターンシップのプログラムを必修科目として行っている。さらに、学科内に併設している植物医科学センターにおいても、共同研究契約による研究を行っており、農業研究センターや企業等との連携協力により教育研究を進めている。

国際交流面では、「さくらサイエンスプラン」の「科学技術交流コース」に採択され、ベトナムの大学生10人(カントー大学、ハノイ工科大学、VNU 工科大学、VNU ホーチミン市情報技術大学)を招聘した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
各学科が専門分野に応じ、各教員が社会との様々な連携を進めている。	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

生命科学部では、各教員個々の努力と工夫により、授業に企業の担当者や研究員を招聘したり、学科セミナーの講師を学外者に依頼したりし、学外組織との連携協力を図っている。学外の研究センターや企業と共同研究契約を結んでいる例もあり、教育・研究の推進のみならず、社会貢献活動も活発に行われている。取り組み内容自体は多に評価できるが、教員個人の人的関係に大きく依存し、属人的な運営の側面も大きいように見受けられる。内容の継続のためには、学科・学部内での業務分担や運営ノウハウの伝承なども必要になる。

9 大学運営・財務

【2018年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

9.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の役職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

①学部長をはじめとする所要の職を置き、また教授会等の組織を設け、これらの権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
--	---

(～200字程度まで) ※概要を記入。

学部長以下、さまざまな事案を担当する各種委員会を設け、各種規程を整備し、学部・学科運営を行っている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各種規定
- ・各種委員会委員名簿

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

生命科学部では、学部長をはじめとして所要の職が置かれ、教授会が設けられている。執行部は学部長、教授会主任、教授会副主任の3名からなる。学部長以下、様々な事案を担当する各種委員会が設けられ、各種の規程が整備され、規程に則り、学部および学科の運営が行われている。

III 2018年度中期・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	生命科学部では、自然科学の知識を基盤として多様な生命科学を学ぶことができることを、在学生および受験生と保護者などに対して周知する。
	年度目標	学部パンフレットなどの印刷体と生命科学部および3学科のホームページに掲載されている理念・目的を、ホームページ一体化して、わかりやすい形に改編する。
	達成指標	掲載ページの訪問回数、および新入生アンケートにおける回答内容。
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	自己点検作業における執行部会議と質保証委員会の役割をより明確に分けた現在の体制を維持し、厳格なPDCAサイクルを行う。
	年度目標	前年度と同じく、4回の質保証委員会を開催し、活発な議論を行う。
	達成指標	委員会議事録で開催回数、および議論の内容の記録。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	中期目標	学部開講科目における教養科目と専門科目の連携を強化すると同時に、ディプロマ・ポリシーと各科目の関連性を明確にする。
	年度目標	教養科目から専門科目への連続性が強化されるよう、学部所属の教養担当教員と専門科目担当教員の懇談を行う。新しい形のカリキュラムマップ、カリキュラムツリーを作成してホームページなどに掲載する。
	達成指標	懇談会の開催記録。履修の手引など。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	100分授業の特性を活かしたアクティブ・ラーニングの実施を促進する。
	年度目標	教員へのアンケートにより、アクティブ・ラーニング実施授業の数を調査する。
	達成指標	アクティブ・ラーニングの実施状況についてのアンケート結果。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	学習の総合的な結果である研究成果を対外的に発表することを促進する。
	年度目標	学会、研究会、交流セミナーなどの学外発表の機会において、学部生が発表した記録を調査する。
	達成指標	学外発表の回数。
No	評価基準	学生の受け入れ
6	中期目標	広報イベントを通じた受入方針の周知について、効率のよい方法を確立する。
	年度目標	受け入れ方針の周知にもっとも効果的な広報イベントを明らかにするため、新入生に対して、生命科学部のどの広報イベントに参加したかをアンケート調査する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	達成指標	アンケートの分析とその検証結果。
No	評価基準	教員・教員組織
7	中期目標	①教養教員の採用および教養科目の担当教員の再編を含め、生命科学部にふさわしい教養教育を行う体制を整える。
	年度目標	環境応用化学科では、化学を担当する教養教員を採用する。
	達成指標	教員採用記録。教養科目の担当者変更記録。
No	評価基準	教員・教員組織
8	中期目標	②在外研究を推進する。
	年度目標	研究室配属学生を抱え、実験・研究を指導する必要がある教員でも在外研究員制度が利用しやすくなるような方策を、将来構想委員会において検討する。
	達成指標	将来構想委員会の議事録。在外研究の実施人数。
No	評価基準	学生支援
9	中期目標	留学生に対する修学支援制度を確立する。
	年度目標	教員の指導により、2年生以上の成績優秀な留学生と、主に留学生を対象とするチューターとの懇談会を行う。
	達成指標	懇談会の開催記録。
No	評価基準	社会貢献・社会連携
10	中期目標	学外へ向けて研究・教育活動の紹介を促進する。
	年度目標	公開セミナー、市民講座、見本市、展示会、外部参加者のいる研修会、学園祭などにおける研究室公開などにおける紹介活動をアンケート調査する。
	達成指標	アンケート調査の結果、紹介活動の例数。
<p>【重点目標】 <社会貢献・社会連携> 生命科学部の多くの研究室では、これまでも様々な機会に学外へ向けて研究・教育活動を紹介してきたが、それらは個々の研究室、学科ごとに行われていた。それらの活動を学部が調査して、研究室間、学科間で情報を共有することにより、効果的で効率のよい紹介の仕方を明らかにし、それらを実施することで紹介活動の促進をはかる。</p>		

【2018年度中期・年度目標の大学評価】

教育課程・学習成果に関しては、中期目標として教養科目と専門科目の連携強化、アクティブ・ラーニングの実施促進、研究成果の対外発表推進などが挙げられており、項目として適切である。教員・教員組織に関する第2項目に、在外研究の促進が挙げられているのが目を引くが、組織の活性化、国際競争力の強化にも有効であろう。在外研究を実施しやすい環境・体制づくりを是非検討頂きたい。学生支援については優秀な留学生に対する支援強化が挙げられており、こちらも是非実施頂きたい。全項目とも設定内容は適切であり、年度目標および達成指標の記述には具体性があり、第三者でもイメージしやすい。

【大学評価総評】

生命科学部にとって2017年度は、現在の3学科体制になって初めての卒業生を輩出したが、今後は大学院組織とも連携しながら、教育・研究体制の点検と改善が必要になってくるであろう。質保証、教育課程・学習成果、学生の受け入れ、学生支援に関する各項目については、総じて良好な運営がなされている。教員・教員組織については、求める教員像および教員組織の編制方針が極めて明瞭に示されている点が目を引き、評価できる。社会連携・社会貢献については、外部組織との共同研究や展示会への出展など、大変活発な活動がなされており、この点も評価できる。ただしこれらの活動は、社会連携・社会貢献の評価所見および2018年度の重点目標にも記載があるとおり、教員個人あるいは研究室単位での取り組みが多かったように見受けられる。属人的、局所的でなく、学部組織として継続発展が可能な体制になるよう、ノウハウの共有や伝承を行う取り組みに期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。